

ドイツ政党本部回遊の記

黒川 康

世の中何が起るか分からないというが、ドイツ統一は誠にアレオアレオの驚きであった。ドイツ現代史の先生が学生に何と格好をつけようと、研究者仲間では、その前年までフンボルト大学に留学していた同僚を筆頭に、まるで予測不能であったと白状しあうのが実態であった。戦後史をテーマにとつねづね考えていたものだから、なにがなんでも「統一論文」を書こうと決意を固めたまではないのだが、どこから手を着けていいものやら。連邦文書館以下は有りや無しやの返答であったが、なじみのボンの社会民主党(SPD)文書館では統一関係の史料はまだ収集整理を始めたばかりなので、政党本部直属の文書室がよいと教えてくれた。党本部にその旨書き送ったら、十数名の連邦議会議員の名をあげ、伝えてあるのでインタビューを許可すると返答してきた。これは一九九一年のことである。ためしにまずは質問表を送ったら、答えられない、知らないというのがほぼ全員の返事であった。党本部承認にしてはまるで素っ気ないなど思った。まさにナチス突撃隊大学校長のときは質問表にも丁寧にも答え、ナチス時代は記憶にないと言わなかった。だが考えてみればそうだがSPD議員の「沈黙」は理由のあることで、党はドイツ統一につ

ドイツ政党本部回遊の記（黒川）

いては複雑な立場におかれていたのだ。九七年の海外研究で「統一論文」はこのSPDのジレンマをテーマとする「ドイツ統一と一民族二国家論」（投稿予定）となった。

この機会にすべての政党を当たることにした。まずキリスト教民主同盟(CDU)の党本部文書室はボン近郊にあるアデナウアー財団の中にある。責任者に室に案内され、驚いた。巨大な体育館に巨大な書架がビッシリと立ち並び、一〇名ほどの職員が新聞・雑誌などを忙しく切り抜きし党用紙にコピーをしている。「どうぞ好きなファイルを自由にコピーしてください」。さすが、他政党のファイルも多くある。中味はほとんどが刊行物の切り抜きである。ただ党内・議員通信のファイルばかりは、職員を押しつけながらコピーした。現代史の未刊行史料なるものは六割ほどが切り抜きである。だからこうした職員の労を多とするも、切り抜きそのものに発行日時が確認できないものは使用しないのである。こうして一〇年後の未刊行史料が製造されているのだ。「党幹部会や議員個人の記録は、まあ手続きが大変でしてね」。この党を正面から扱う予定はないので一週間後に丁重にお礼を述べて引き上げた。

キリスト教社会同盟(CSU)の党本部文書室はザイデル財団の中にある。財団は旧友がとってくれた、ミュンヘン大学に隣接する宿舍「研究者の国際センター」の近くにあった。学位申請論文『ドイツとバイエルン ある地域主権の現代史一九一八〜一九九〇』の最終章がCSUを扱うため、財団にほぼ日参した。中規模の文書室の作業はおなじで職員が忙しく立ち働いている。この財団には戦後ドイツの政党分析をしている中堅研究者がいるので話をした。幹部会記録などの未刊行史料はドイツ人でも使用許可が難しいとのこと。「党首に直訴する手はありますが、それでも一年は返事がないでしょうね」。だが党幹部会記録を

一つだけ、手書きでいいながらも結局まるごとコピーしてくれた。彼は自分はCSU 党员だった、なんともなく目を伏せた。われわれが科研や学振で日本に招待した十数名の歴史家は二名を除いて全員がSPD 党员であった。廊下には日本の自民党訪問団の記事がピンで留めてあった。日参するので職員から「チョット、コーヒーいかが」とお誘いがかかり、宿舎に「コピーできてますよ」と連絡がくるようになった。宿舎の管理人もCSU 党员である。不吉な予感が迫りはじめた。「いかがですか、党にご協力願えませんか」を回避せんがため、日参をゆるゆると週参から月参へと切り替えた。

ボン郊外のSPD 本部では小さな文書室で職員が忙しく切り抜きをしていた。議員間の通信記録などをコピーさせてもらった。内容がもつとも現代に近い「ブランド文書」が党文書館にデポされたが、この閲覧許可には時間がかかるとのことであった。それではとミュンヘンの党バイエルン支部にむかった。すぐに党史の著作もある元文化部長を紹介された。いま体調を崩している、夏に手持ちの材料を「すべて」提供しようとなった。党の統一政策についてなにか言いたいことがありそうな文面だった。ところがいざらしくして支部長から「氏は逝去されました。これ以上のコンタクトはできないでしょう」という一行の連絡がきた。ビックリし残念であった。夏を越えた一〇月、バイエルン北部の見知らぬ女性から小包が届いた。かの氏のお嬢さん（教師）であった。「父の遺品の中にあなたへの手紙のコピーがあり、夏に父が手持ちの資料をすべて提供するとありました。父の資料は大量にありましたが、すべてボンの党本部職員が『文書』をつくるために持っていきました。この文書の閲覧には時間がかかるそうです。ただビデオが残っておりましてので、よろしければ差し上げます」。統一をめぐるさまざまな集会の長時間の記

ドイツ政党本部回遊の記（黒川）

録であった。モーツアルト・リチャード・コレートの最高級品をいっぱい送った。

寒くなる頃、緑の党（DIE GRÜNEN）の、ボン近郊にある小さな文書館を訪問した。ここでは党幹部会記録から議員のメモなど未整理のまますべて閲覧できた。コピーもできた。「わが党の基本は情報公開です」。この職員の自信に充ちた対応は未来を先取りしていた。

最後に民主社会党（PDS）であるが、最初はアツサリ断られた。それでボンの政府関係筋に一言書いたのが効いたかどうかは判らないが、ご希望ならばお出でくださいとの連絡があった。文字どおりベルリンへ飛んでいった。党本部はかつてのドイツ共産党本部カール・リープクネヒト・ハウスがあった近くであり、職員が待っていた。順番に党機関紙、党大会記録ときたが、わたしはプロなのでここでしか見れない史料を、といった。彼女は頬をゆるめながらやおら棚から取り出したのが、前東ドイツ諸州の地域委員会の選挙分析報告書であった。昼飯抜きでこれらをコピーし続けた。

「統一論文」は DIE GRÜNEN と PDS の史料が中心であるが、それにしても政党の文書室は整理されているなと感心した。帰国後、日本の各政党に、ドイツ統一に関する党史料などの所在について問合わせたら、公明党と共産党が党機関紙の一部コピーを送ってきた。これがすべてであった。

（二〇〇三年七月二五日記）

（立教大学文学部教授）